

令和 6 年 5 月 21 日現在

機関番号：34419

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K14940

研究課題名（和文）イタリア北部のアドリア海沿岸及びその周辺における地域形成史に関する研究

研究課題名（英文）Study on the history of regional formation on and around the Adriatic coast of northern Italy.

研究代表者

樋渡 彩 (Hiwatashi, Aya)

近畿大学・工学部・講師

研究者番号：90793696

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：イタリア北部のアドリア海沿岸及びその周辺地域を対象として、河川や運河といった水路（航路）や、街道のような陸路と密接に結びついて形成された都市および周辺地域の在り方を考察した。アドリア海沿岸部、アドリア海に注ぐバッキリオーネ川流域、ピアヴェ川流域、ポー川流域など地域を取り上げ、ローマ帝国やヴェネツィア共和国の影響を確認することができた。ヴェネツィア周辺に広がるラグーナ・ヴェネタについては、ラグーナの島々の形成過程を追いながら、周辺との関係を捉えることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、古代から現代まで俯瞰するという時間的領域と、空間的領域のどちらも新しい試みである。空間的領域として、ヴェネツィアの形成と発展の本質を解読するためにヴェネツィアだけでなく、その周辺をとりまくラグーナ、さらにその背後に広がるテッラフェルマとの関係について考察する。また、グラードからラヴェンナまでの都市および田園も含めた一帯を俯瞰して捉え、それぞれの都市を位置づける新たな試みとなる。

研究成果の概要（英文）：The study examined the way in which cities and surrounding areas were formed in close connection with waterways (routes) such as rivers and canals, and overland routes such as roads, on the Adriatic coast of northern Italy and its surrounding areas. The study covered the Adriatic coast, the Bacchiglione river basin, the Piave river basin and the Po river basin, where the influence of the Roman Empire and the Venetian Republic could be identified. For the Laguna Veneta, which extends around Venice, it was possible to follow the formation process of the islands of the Laguna and capture their relationship with the surrounding area.

研究分野：都市史

キーワード：ヴェネツィア ラグーナ テリトリーオ

## 1. 研究開始当初の背景

ヴェネツィアにおいては国内外の研究蓄積はあるが、ヴェネツィア本島内にとどまっているのが現状である。ラグーナに関する研究やその周辺地域に関する研究はほとんどない。

ヴェネツィアのラグーナについては、1966年のヴェネツィア本島に大被害をもたらしたアックア・アルタ（冠水）をきっかけに、それまでの広大な埋め立てによる開発の在り方を反省し、自然環境を保全する方向に進んでいる。こうした背景から法学や生物学の立場からラグーナ全体の自然環境保護に関する研究が行われ、実践的にも取り組まれている。そして2015年、都市史の視点からラグーナ全体を捉える動きが初めて登場し、共和国時代のラグーナはヴェネツィア本島に食料を供給する場として役割を担っていたという位置づけがなされた<sup>注1</sup>。ラグーナ内の島々や自然環境への関心が高まりつつある現在、都市史の立場から、ヴェネツィア本島との関係のなかでラグーナがどのような役割を担ってきたのか、より広い視点から考察することが求められている。

ヴェネツィアの背後に広がる本土（テッラフェルマ）については、各地の郷土史的研究の蓄積はなされているが、ヴェネツィアの形成と発展を読み解く視点からテッラフェルマを捉えた総合的な研究はほとんどない。さらに、ヴェネツィアの形成・発展の理解をさらに深めるためには、時間軸方向を伸ばし、ヴェネツィア共和国前後の時代も考察する必要がある。

ヴェネツィア以外の既往研究はかなり限られている。研究対象地において、この地域の共通点として、古代ローマ時代から都市が存在することでも知られているため、発掘調査が行われている。近年、発掘が進められており、考古学分野での蓄積がある。この成果を都市史の視点から捉え直す必要がある。またローマ帝国崩壊以後も、東ローマ帝国（ビザンティン帝国）の影響を受けている。この時代はモザイクで飾る宗教施設が建設されたことでも知られ、現在もこの地域には各地で見ることができる。そのため、美術史分野では、モザイク装飾のある宗教施設が注目されているが、建築を都市のなかで捉えるような視点に欠けている。このように、ヴェネツィア以外の地域において、都市史の分野はこれから耕す領域であることがわかる。

こうした研究の蓄積を踏まえ、特徴的な水都が誕生、成立、繁栄できた真の理由、背景を考察し、地域形成論の構築を試みる。この水の側から地域形成のメカニズムを読み取る視点は、都市史研究に新たな領域を切り開くとともに、日本における実践的な都市づくり、地域づくりにとっても有効な一つになり得ると考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究は、ヴェネツィアの都市史研究において、空間的、時間的に領域を広げるものである。具体的には、北はグラードから、南はラヴェンナまでを主に対象とすることから、ヴェネツィア共和国の領土とは異なる新たな領域を扱うことになる。また、ヴェネツィアの歴史的研究において、ヴェネツィア共和国時代が主に扱われる一方で、本研究はヴェネツィア共和国が成立する以前から、ヴェネツィア共和国の崩壊以後そして現在までを捉えることから、これまでにない時間軸で俯瞰することになる。

ヴェネツィア研究では、これまで「海洋都市国家」の位置づけで論じられて、アドリア海側に目が向いていたのに対し、本研究は、逆方向の本土側に目を向けている。これは新たな視点であり、地域形成史を論じるという、歴史分野における大きな進展を示すものである。

これまで注目してきたヴェネツィアにおいては、『ヴェネツィアのテリトリーオ 水の都を支える流域の文化』（樋渡彩、法政大学陣内秀信研究室、鹿島出版会、2016年）、『ヴェネツィアとラグーナ 水の都とテリトリーオの近代化』（樋渡彩、鹿島出版会、2017年）にまとめている。そして、この地域形成の枠組みを日本に応用し、瀬戸内地域の枠組みをテリトリーオで提示した（「特集 瀬戸内テリトリーオの再構築」『建築雑誌』2019年5月号、日本建築学会）。

こうした地域の枠組みを捉える新たなモデルケースとして、本研究では、同様の地形である湿地帯に位置するグラード、カオルレ、ヴェネツィア、コマッキオ、そしてかつてのラヴェンナなどに着目する。これらの都市を点ではなく、周辺地域を含む、「面」として比較・考察することで、新たな地域論を構築する一助とする。

## 3. 研究の方法

本研究はイタリア北部のアドリア海沿岸及びその周辺地域を研究対象地とする。対象地全体を俯瞰する考察と個々の場所について発展または衰退過程を描きながら全体のなかで分析する。

## 4. 研究成果

### (1) ラグーナ・ヴェネタ

ラグーナ・ヴェネタ（Laguna veneta）はヴェネツィアのラグーナ（laguna di Venezia）とも呼ばれ、1987年にヴェネツィア本島とラグーナ全域（Venezia e la sua Laguna）が世界遺産に登録された。規模は面積約550km<sup>2</sup>、全長49km、全幅13kmで、ヴェネツィア県とパドヴァ県にまたがる広大な潟である。本研究ではトルチェット、マツォルボ、サンテラズモなどのラグーナの島々の変遷を概観した。

トルチェットは「ヴェネツィア発祥の地」と称されるように、ラグーナ・ヴェネタのなかでも古くから居住地だったことが知られている。ここでは島全体の変化の過程を追った<sup>注2</sup>。限られた史料ではあったが、居住地が衰退する例を示すことができた。15世紀は現在よりも建物があ

ったことが地図から確認でき、運河に沿って建物が並ぶラグーナの典型的な建物配置も読み取れた。地形は遅くとも1670年から大きな変化がないことがわかった。土地利用については、19世紀初頭から現在まで農地が大きな割合であると位置付けた。

マツォルボは、ブラーノ島と橋でつながれた島である。観光地ではないため、一般的にはあまり知られていない。しかし、歴史は古く、紀元前5世紀の遺跡が見つかっており、「大都市」を意味する「Majurbium」と呼ばれていた。マツォルボは空間構造を維持しながらも周辺との関係で発展、衰退してきたことがわかった<sup>注3</sup>。マツォルボの発展を次の3つに大きく分けた。

古代は、アルティーノとの関係のなかで発展した。12、13世紀以降は、ヴェネツィアとトルチェロとの関係で発展し、両者を結ぶ運河が都市軸として確立していた。19世紀以降は、架橋と住宅開発の位置から、ブラーノとの関係が大きい。

サンテラズモは農地が広がっており、「ヴェネツィアの菜園」と呼ばれる。歴史的にはブドウ畑が広がっていた。現在もブドウの栽培が行われており、収穫したブドウでワインも生産される。サンテラズモは、ラグーナの防衛線として役割を担っていた時期もあったが、農業という長い歴史をもつ島であることが確認できた<sup>注4</sup>。13世紀にはすでにブドウ畑が存在し、16世紀には島全体がブドウ畑として利用されていた。16世紀の短冊形の敷地割りという空間構造を、現在もなお維持し、農地として土地利用も継承されていることがわかった。

このように個々の島の役割を時代ごとに追いながら、ラグーナ・ヴェネタ全体の空間形成を考察した。まだ考察出来ていない島があるため、今後も各島の形成過程を追いながら、周辺との関係を捉え、ラグーナ全体の空間形成の変遷を考察する必要がある。

ラグーナ全体においては、限られた史料を収集し、地形の変遷を把握した<sup>注5</sup>。また、断片的ではあるが、1798～1805年に作製された地図を用いて、当時の土地利用を把握することができた<sup>注6</sup>。

## (2) バッキリオーネ川流域

バッキリオーネ川はアドリア海に注ぐ河川のひとつである。これまでブレンタ川、シーレ川を中心に研究を進めてきたが、本研究ではバッキリオーネ川流域に新たに取り組んだ。

まず、バッキリオーネ川流域の古代の居住地の位置について把握した<sup>注7</sup>。旧石器時代末から中石器時代においては、山岳地帯と丘陵地帯に住居があり、狩猟を中心に移動しながら生活していた。この時代は洞窟や岩場が好まれた。新石器時代には、農業の開始によって定住するようになった。農業に適した河川の近くの肥沃な場所が選ばれた。続く銅器から青銅器時代では、古代ヴェネト人がガルダ湖からエウガネイ丘陵にかけて定住し、農業と牧畜で生活していた。農業によるパダナ平野全体ではトランズマンツァによる丘陵地や山の麓で人間の活動が見られた。そして、鉄器時代には、河川の重要性が高くなり、古代ヴェネト人によって河川付近に集落が形成された。また、水の近くに聖域が置かれていたことから、鉄器時代は、水と密接な関係があったことがわかった。ローマ時代には、海との関係が強くなり、アドリア海側に集落が形成されたことを確認した。街道が敷かれるも、既存の居住地が発展する傾向が見られた。都市も農地もローマ時代の計画が現代の基盤になっていることを確認した。

また、バッキリオーネ川流域には、ヴィチエンツァやパドヴァといったヴェネツィア共和国に統合されていた都市が存在し、ヴェネツィアとの関係のなかで都市が発展してきた背景がある。それらの都市の発展段階を「ポルティコ」という建築要素に着目し、考察した。

ポルティコは建設年代により形が様々で、そのポルティコの種類の豊富なパドヴァで、ポルティコの形状と年代の指標作成を試みた。ポルティコの建設年代の指標が作成できれば、ヴェネト州およびほかの地域の都市形成史の考察が可能となる。パドヴァでは、ロマネスク、ゴシック、ルネサンス、バロック、ネオ・ルネサンス、現代など各時代のポルティコ形状が確認できた。2022年度は19種類を確認し、その年代把握に努めた。その成果の一部を建築学会で発表した<sup>注8</sup>。2023年度は、引き続き、パドヴァの指標作成を行い、同時にヴィチエンツァ、トレヴィーゾ、メストレなどほかの都市および集落のポルティコ形状も考察し、形成過程を考察した。

地域全体を把握することで古代ローマ帝国やヴェネツィア共和国の影響について考察を進める。

## (3) ピアーヴェ川流域

ピアーヴェ川はアドリア海に注ぐ河川のひとつである。ピアーヴェ川については歴史的に木材輸送を行っていた河川であることを研究してきた。本研究では、ピアーヴェ川流域に位置する都市の立地について考察した<sup>注9</sup>。ピアーヴェ川流域において、河川との高低差が「40m以上」と「20m前後」の都市および集落が多く、洪水から身を守るため都市発展しやすい傾向があることがわかった。本流と支流の両方に見られたことから河川における一般的な都市・集落の立地のタイプであると位置づけた。河川に対して集落が奥に広がるかどうかについては、背後に聳える山の位置に関係している。また、河川に対して平行に都市が広がる場合は、河川との関係の強さあるいは、河川沿いに街道が通っていることが挙げられ、ピアーヴェ川流域でもほかの河川と同様の傾向が見られた。また、支流では、集落が2段階に連なっている場合があり、河川との高低差が40m以上と河川との高低差20m前後の組み合わせになっている。どのような関係があるの

かは今後の課題とする。そして河川から「10m 未満」の場合は、河川との距離が短いところが多く、河川とのつながりが深いことが確認できた。治水の観点から考えると危険な場所であり、本流では、木材産業との関係が確認できた。その一方で、流では数多く見られ典例であることがわかった。さらに2つの河川に挟まれる場所は産業の拠点になりやすく集落が発展する傾向を確認することができた。森や鉱山といった資源に恵まれたピアーヴェ川流域は、内陸部でも河川を利用した産業が興り、自然環境を最大限に利用しながら発展してきたことが確認できた。

#### (4) ラヴェンナからアクイレイア

本研究では、4世紀または5世紀前半に最後の修正が行われたとされる「タブラ・ペウティンゲリアナ (Tabula Peutingeriana)」と呼ばれるローマ帝国時代の道路地図に掲載されている地名を確認し、どのような町が存在したのかを把握した<sup>注10</sup>。この道路地図から、ローマから四方八方に赤い線が描かれており、ローマの街道が各地に伸びていることがわかる。この地図からイタリアの中部に横たわるアペニン山脈を読み取ることができ、ローマ街道がアドリア海側の海岸に沿って通っていたことがわかる。アクイレイアは、城壁のある都市が描かれ、この地域一帯で最も強調して描かれていることが読み取れた。また、当時の河川の河口がどの辺りにあったのかも把握することができた。

ラヴェンナとアクイレイアが重要な都市であり、それに続いてアルティーノがローマ帝国にとって重要な場所だったことが読み取れた。馬の乗り換え場所から現在とは違う交通の要衝を読み取ることができた。また、この地図には船の航路が描かれていないが、街道と平行して「フォッサ・アウグスタ (Augusta)」が掘削されていたことも把握した。「フォッサ・アウグスタ」はラヴェンナからスピナ (Spina) を結ぶ運河で、続くスピナからアドリア (Adria) は「フォッサ・フラヴィア (Fossa Flavia)」が接続した。キオツジアまでは、「フォッサ・クロディア (Fossa Clodia)」である。アルティーノからカオルレ (Càorle) までを「フォッサ・ポピッリオラ (Fosssa Popilliola)」という運河で航行した。そしてアクイレイアまでは「アンフォラ運河 (Canale Anfora)」が通っていた。キオツジアからアルティーノは、ラグーナ・ヴェネタを通ると考えられる。

ラヴェンナについては、もともとヴェネツィアのような湿地帯に位置した浮島のような都市だったことが明らかにされており、引き続き資料を収集する必要がある。

また、本研究を通して、アドリア海に注ぐポー川に位置するフェッラーラ一帯も新たに見る必要が出てきた。フェッラーラは、古代ローマ時代に始まる。ルネサンスの都市改造は有名だが、それ以前の情報として、7世紀初期に遡る地区を把握した。また、中世に形成したエリアとポー川の位置関係を考察し、水に囲まれていた都市であったことが確認できた。フェッラーラとアドリア海の間ポー川の下流域については、エトルリア人が住んでいたことが発掘調査から明らかにされていた。この辺りの湿地帯に位置するコマッキオよりもずっと古くから周辺に水路を張り巡らした水上の集落が出来ていたという。グラードからラヴェンナまでの間で、ポー川河口辺りは何もないと推測していたが、新たな一面を捉えることができた。

コマッキオ、アルティーノなど、博物館の史料から古代の状況を把握することができるが、コロナ禍の影響もあり史料収集を充分出来ていないため、これらの都市の考察については今後の課題とする。

注1) D.Calabi, L.Galeazzo, *Acqua e cibo a Venezia: storie della laguna e della città*, Venezia, 2015.

注2) 樋渡彩「ラグーナ・ヴェネタにおける居住地の変遷に関する考察——トルチェッロを事例として」『日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)』日本建築学会、2020年7月、pp.705-706。

注3) 樋渡彩「マツォルボにおける空間構造に関する歴史的考察」『日本建築学会大会学術講演梗概集(東海)』日本建築学会、2021年9月、pp.551-552。

注4) 樋渡彩「サンテラズモにおける空間構造に関する歴史的考察」『日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿)』日本建築学会、2023年9月、pp.85-86。

注5) 樋渡彩「ラグーナ・ヴェネタの歴史的変遷に関する研究」『日本建築学会大会学術講演梗概集(北海道)』日本建築学会、2022年9月、pp.547-548。

注6) 樋渡彩「ヴェネツィア・ラグーナにおける18世紀末の空間構造に関する考察」『日本建築学会関東支部研究報告集』91巻、日本建築学会、2021年3月、pp.561-564。

注7) 田村正義、樋渡彩「古代バッキリオネ川流域における居住地の位置に関する考察」『日本建築学会中国支部研究報告集』44巻、日本建築学会中国支部、2021年3月、pp.845-848。

注8) バッキリオネ川流域に関連する成果は次に発表している。岩谷柊治、樋渡彩「ヴィチエンツァにおけるポルティコの形状比較」『日本建築学会中国支部研究報告集』47巻、日本建築学会中国支部、2024年3月、pp.870-873。パドヴァのポルティコに関する研究は、「パドヴァにおけるポルティコの形状に関する歴史的考察——サント地区を対象としてその1」(樋渡彩ほか

『日本建築学会中国支部研究報告集』46 巻、日本建築学会中国支部、pp.1031-1034)のほか多数発表。エステという都市については、「小都市エステにおけるポルティコの形状に関する歴史的考察」(小野樹、樋渡彩『日本建築学会中国支部研究報告集』44 巻、日本建築学会中国支部、2021 年 3 月、pp.849-852。)などがある。

注 9) 河村陸、樋渡彩「ピアールヴェ川流域における集落の立地に関する歴史的考察」『日本建築学会中国支部研究報告集』44 巻、日本建築学会中国支部、2021 年 3 月、pp.853-856。

注 10) 中村友也、樋渡彩「古代ローマ時代の街道および都市に関する考察- ラヴェンナからアクレイアを対象として」『日本建築学会北海道支部研究報告集』95 巻、日本建築学会、2022 年 6 月、pp.275-278。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 樋渡彩	4. 巻 66
2. 論文標題 ヴェネツィア	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 建築知識	6. 最初と最後の頁 28-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 樋渡彩	4. 巻 66
2. 論文標題 パドヴァ	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 建築知識	6. 最初と最後の頁 34-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 樋渡彩	4. 巻 103 号
2. 論文標題 水の都ヴェネツィア 誕生から水上テラスの出現まで	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 建築と社会	6. 最初と最後の頁 30-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計26件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 樋渡彩
2. 発表標題 甦るラグーナ・ヴェネターー自然環境と歴史の再評価
3. 学会等名 100年後の安心のためのTOKYO強靱化世界会議実行委員会、イタリア文化会館（招待講演）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 小野樹、樋渡彩
2. 発表標題 小都市エステにおけるポルティコの形状に関する歴史的考察
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 樋渡 彩
2. 発表標題 19世紀から20世紀初頭におけるヴェネツィアの都市構造の変化
3. 学会等名 都市史学会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 樋渡彩
2. 発表標題 サンテラスモにおける空間構造に関する歴史的考察
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 吉田真子、樋渡彩
2. 発表標題 ボローニャの絹産業について
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 久安佑歩、樋渡彩
2. 発表標題 ヴィチェンツァのポルティコの位置について
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 西真人、樋渡彩
2. 発表標題 パドヴァにおけるポルティコの形状類型
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岡部和真、樋渡彩
2. 発表標題 トレヴィーゾにおけるポルティコの形状比較
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岩谷柊治、樋渡彩
2. 発表標題 ヴィチェンツァにおけるポルティコの形状比較
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2023年



1. 発表者名 有田雄一朗、樋渡彩
2. 発表標題 ヴェネツィア共和国下のメストレについて
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田中碧衣、樋渡彩
2. 発表標題 イタリアにおけるトマト産業について
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 樋渡彩
2. 発表標題 ラグーナ・ヴェネタの歴史の変遷に関する研究
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 樋渡彩、西真人、中澤流星、吉田真子
2. 発表標題 パドヴァにおけるポルティコの形状に関する歴史的考察    サント地区を対象として その1
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中村友也、樋渡彩
2. 発表標題 古代ローマ時代の街道および都市に関する考察 ラヴェンナからアクイレイアを対象として
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中澤流星、吉田真子、樋渡彩
2. 発表標題 パドヴァにおけるポルティコの形状に関する歴史的考察 ヴェスコヴァド地区とカステッロ地区を対象として
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉田真子、樋渡彩
2. 発表標題 パドヴァにおけるポルティコの形状に関する歴史的考察 ピアッツェ地区を対象として
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉田真子、樋渡彩
2. 発表標題 16-18 世紀における小都市エステの空間構造に関する研究
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 原田拓海、樋渡彩、久安佑歩
2. 発表標題 ヴェネツィア共和国を示すシンボルの位置に関する考察
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 西真人、樋渡彩、中澤流星、吉田真子
2. 発表標題 パドヴァにおけるポルティコの形状に関する歴史的考察    サント地区を対象として その2
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岡部和真、樋渡彩、中澤流星、吉田真子
2. 発表標題 パドヴァにおけるポルティコの形状に関する歴史的考察    プラート・デッラ・ヴァッレ地区を対象として
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 有田雄一郎、樋渡彩、中澤流星、吉田真子
2. 発表標題 パドヴァにおけるポルティコの形状に関する歴史的考察    オンニサンティ地区を対象として
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岩谷柊治、樋渡彩、中澤流星、吉田真子
2. 発表標題 パドヴァにおけるポルティコの形状に関する歴史的考察    サンタ・ソフィア地区を対象として
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 古庄裕喜、樋渡彩
2. 発表標題 パドヴァにおけるポルティコの形状に関する歴史的考察    サン・ニコロ地区とゲッター地区を対象として
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 久安佑歩、樋渡彩
2. 発表標題 ポルトグルアー口におけるアーチの形状比較に関する研究
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 河村陸、樋渡彩
2. 発表標題 ピアーヴェ川流域における集落の立地に関する歴史的考察
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田村 正義 , 樋渡 彩
2. 発表標題 古代パッキリオーネ河流域における居住地の位置に関する考察
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 樋渡彩	4. 発行年 2022年
2. 出版社 近畿大学工学部建築学科 都市歴史研究室	5. 総ページ数 73
3. 書名 2021年度 都市歴史研究室報告書 WEB 版	

1. 著者名 樋渡彩	4. 発行年 2022年
2. 出版社 近畿大学工学部建築学科 都市歴史研究室	5. 総ページ数 71
3. 書名 2021年度 都市歴史研究室報告書	

1. 著者名 樋渡彩	4. 発行年 2021年
2. 出版社 近畿大学工学部建築学科 都市歴史研究室	5. 総ページ数 63
3. 書名 2020年度 都市歴史研究室報告書 WEB 版	

1. 著者名 樋渡彩	4. 発行年 2021年
2. 出版社 近畿大学工学部建築学科 都市歴史研究室	5. 総ページ数 63
3. 書名 2020 年度 都市歴史研究室報告書	

1. 著者名 樋渡彩	4. 発行年 2023年
2. 出版社 近畿大学工学部建築学科 都市歴史研究室	5. 総ページ数 104
3. 書名 2022 年度 都市歴史研究室報告書	

1. 著者名 樋渡彩	4. 発行年 2023年
2. 出版社 近畿大学工学部建築学科 都市歴史研究室	5. 総ページ数 104
3. 書名 2022 年度 都市歴史研究室報告書 WEB版	

1. 著者名 樋渡彩	4. 発行年 2023年
2. 出版社 近畿大学工学部建築学科 都市歴史研究室	5. 総ページ数 70
3. 書名 2023 年度 都市歴史研究室報告書	

1. 著者名 陣内 秀信、植田 暁、マッテオ・ダリオ・パオルッチ、樋渡 彩	4. 発行年 2022年
2. 出版社 古小烏舎	5. 総ページ数 480
3. 書名 トスカーナ・オルチャ渓谷のテリトーリオ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関